



東 俣 野 6月号

東俣野小学校 学校だより 令和8年5月29日

“交通安全と地域の絆“

校長 幸保 陽子

6月を迎え、雨の日が多くなる季節となりました。傘をさして歩く登下校では、視界が狭くなったり、足元が滑りやすくなったりします。特にこの時期は、交通安全について、改めて考える大切な機会です。

本校では、先日、横断歩道の歩き方や自転車の安全な乗り方などについて、警察署の方からご指導いただきました。毎年1年生と3年生を対象に繰り返し学んでいるところです。子どもたちは「止まる」「見る」「待つ」を意識しながら、一生懸命に安全に行動しようとしています。しかし、交通安全は、子どもたちの力だけでなく、家庭や地域の方々の支えも大切だと考えます。

朝、通学路に立ってくださる安全サポートの会の方々。「おはよう。」「気を付けてね。」と声をかけてくださる方々。危ない場所では、そっと見守りながら声をかけてくださる方々。子どもたちは、多くの温かさの中で学校生活を送っています。

昔から、日本には「向こう三軒両隣」という言葉があります。近所同士が自然に助け合い、互いを気にかけて暮らしていくという考え方です。今の時代には、昔に比べると地域とのつながりが薄くなっていると言われていています。しかし、子どもの姿を見ていると、今でもこの文化はしっかりと息づいているように感じます。

例えば、低学年の子が困っていると、高学年の子が声をかけている場面があります。車が来た時には「端に寄って。」と声をかける子もいます。横断歩道で車が止まってくれた時に自然に会釈をする子どもの姿も見られます。こうした姿は、自分だけが安全ならよいというという考えではなく、周りの人も大切にするという心から生まれているのだと思います。

交通安全は、単にルールを守るだけでなく、相手を思いやること、周りをよく見ること、少し立ち止まって考えること、そうした心の在り方が、安全な行動につながっていきます。そして、それは学校教育で大切にしている「人との関わり」とも深く結びついています。

地域の中で育つ子どもたちは、多くの大人の姿から学んでいます。横断歩道で止まる車の姿、譲り合う姿、困っている人に声をかける姿、個どもたちは日々の生活の中で「人を大切にすることはどういうことか」を感じ取っています。だからこそ、地域の皆様の温かなかわりは交通安全とともに、子どもたちの心を育てる大きな力にもなっています。

学校では、「見つける・考える・やってみる」を合言葉に子どもたちが主体的に学び、行動することを大切にしています。交通安全も同じです。「危ないかもしれない」と気づき、「どうすれば安全か」を考え、実際に行動に移していく。その積み重ねが、自分の命を守り、周りの人を守る力になっていきます。

子どもたちが安心して学校生活を送るためにも「向こう三軒両隣」のように、互いを気にかけて、支え合う地域の温かさを大切にしながら、子どもたちの成長を共に見守っていきたいと思います。